常に謙虚であらねばならない

世の中が豊かになるにつれて、自己中心的な価値観をもち、自己主張の強い人が増えてきたといわれています。しかし、この考え方ではエゴとエゴの争いが生じ、チームワークを必要とする仕事などできるはずはありません。

自分の能力やわずかな成功を鼻にかけ、傲岸不遜になるようなことがあると、周囲の人たちの協力が得られないばかりか、自分自身の成長の妨げにもなるのです。

そこで集団のベクトルを合わせ、良い雰囲気を保ちながら最も高い能率で職場を運営するためには、常にみんながいるから自分が存在できるという認識のもとに、謙虚な姿勢をもち続けることが大切です。

あわせて、「常に謙虚であらねばならない」ということも私は強調しています。素直であることと同様、謙虚であることも学びの源となります。

中国の古典に「謙のみ福を受く」という言葉があります。傲慢な人間は幸運、幸福は得られない、謙虚な心の持ち主しかそれを得ることはできない、という意味です。

謙虚、つまり謙（へりくだ）ると言えば、何かみっともないような感じを抱かれる人もあるかもしれませんが、それは誤りです。人は、自分に誇るものが何もないからこそ威張り、ふんぞり返って自己顕示欲を満たそうとするものなのです。たとえ控えめに、謙虚に振る舞うことによって他人からばかにされても、それはばかにする人間が間違っているのです。

経営者にとってこのことは、自分の会社が良くなってくればくるほど必要なことです。中小企業の経営者でも、少しもうかりだしたらすぐに天狗（てんぐ）になる人がいますが、それではそれ以上の発展はあり得ません。せっかく神様が収益が上がるように、会社が立派になるようにしてくださったのに、謙虚さを失い、傲慢になるものだから、たちまちに赤字に転落してしまうような羽目に陥るわけです。常に謙虚であらねばならないということを、皆さんはぜひ肝に銘じてください。

企業経営では、集団のベクトルを合わせて、心と心で結ばれた良い雰囲気を保ちながら、高い能率で職場を運営していかなければならないわけです。このすばらしい企業風土を醸成するためにも、経営者自身が謙虚な姿勢を持たなければなりません。経営者が率先垂範（そっせんすいはん）してそのような姿勢に努めることにより、従業員が後に続くことができるのです。

同時に、社員にも「謙虚であってほしい」と訴えなければなりません。課長や部長がふんぞり返っていたり、取締役が威張っていたのでは、チームワークなど取れるはずがなく、決して集団のベクトルはそろいません。役職が高くなるほど謙虚になって従業員の中に入り、自ら懸命に仕事の夢などを語って聞かせ、職場にすばらしい風土をつくり上げるよう努力していくことがたいへん大切なことです。経営者も従業員もそのような「謙虚な姿勢」を持つことで、企業内にはすばらしい人間関係が築かれ、それをベースとして、必ず企業は発展を遂げていくはずです。